

# 木村文助研究

## 通信7号

2003・4・1



大野町が郷土資料室に「赤い鳥・木村文助」コーナーを設けて三年目になる。

ぶんぼけんが一九九九年に赤い鳥復刻版を購入して一気に史料が集まり、出版本、論文、文助の著書なども含め閲覧目録を作製した所、三三〇点にもなり驚くと共に改めて関係者の協力に感謝している。

これらは貴重で大野の宝であり保存と活用を図ると共に、更に史料の収集に努めていきたい。

通信六号発行以降のお便りを紹介する。

道内苫小牧市の木村好氏から「昨年一二月八日父文助の五〇年祭が無事終了した」とのこと。

京都佛教大岡屋昭雄氏から「今年文助の辿った森町、砂原町に調査に入りたい」、鹿児島大狩野浩二氏から「文助の文献収集、研究を一層進めたい」、秋田県久米道彦氏から「赤い鳥に載った綴り方（東京編）をまとめたい」、同県山義郎氏から「大野町との交流を密にしたい」等々寄せられている。

今後も交流の輪が広がり深まることを期待したい。

大野町では教育広報「おおの」を年四回発行し全世界に配布している。赤い鳥に載った綴り方が昨年一〇月号より連載され、今回は一、四月号をまとめて通信に載せた。

### 二〇〇二

一一・一 「木村文助研究」通信六号発行

一一・一 京都佛教大教授岡屋氏より学会発表資料「木村文助研究―母の綴り方・悩みの修身を中心に―」届く

一二・二六 同岡屋教授大野講演録「木村文助の人となり」と綴り方教育のわらわら」発行

一二・二六 写真集函館市・亀田郡・上磯郡の百年「自由主義教育の進展」欄に大野の綴り方教育について載るへ上磯地方史研究会「長落合治彦筆」(郷土出版社)

一一・一 秋田県山義郎氏より自書「鄙のこころ」コーナーへ寄贈

### 二〇〇三

一一・一 連載「赤い鳥に載った大野の作文」(町教育広報おおの)

一一・二〇 町郷土資料室「赤い鳥・木村文助」閲覧目録作製

一一・二五 功績や価値広めたい「赤い鳥・木村文助に関する資料目録」(函館新聞)

一一・三〇 木村文助の資料閲覧目録作製(北海道新聞)

一一・一 投稿 生活綴り方指導者木村文助(北海道文化情報)

一一・一 秋田県久米道彦氏より「マシケ旅日記」、資料室へ寄贈

一一・一 京都佛教大教授岡屋氏より発表論文「生活綴り方における子どもの文章表現の研究」届く

一一・一 連載「赤い鳥に載った大野の作文」(町教育広報おおの)

連載

# 赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーでは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載しています。

赤い鳥には、当時の大野小の木村文助校長が子供たちの作文や絵などを投稿し、次々と入選。「日本一のおつづり方学校」と言われました。

今回は、大正十一年（一九二二）九月号の「兄の病氣」（釣谷くにさん）と同十二年一月号の「母の死」（爲国はるさん）の作文二点と、同十三年十月号の「写生」（松代より子さん）、同年十一月号の「かぶ」（野田正道さん）の自由画二点を紹介します。

## 兄の病氣（賞）

### 大野小高二 釣谷くに

「もう九時だ、寝ようかなア」と足袋を脱いで足をあぶっていると、兄の櫛が山から来た。「今日どうしたことだ、めつたに（珍しく）早いなあ」と父の言ってるうちに、いつも三十分位は馬屋



作文「兄の病氣」「母の死」が載った大正11年9月号と同12年10月号

の方にいるのに、すぐ来て上がり元に横になって、「ああ腹痛い、つまご（雪わらじ）脱がせろ」と言う声が茶の間に聞えたから、行ってみると、苦しそうにうんうんと唸るばかりである。私は薬を出して飲ませるのに急いで、水をまかしたり、茶碗を落として傷つけたりして叱られた。部屋に行つて見ると、姉は一生懸命に腹をもいでいる。

少し経つうちに「少し痛くなくなつた」と言うて何か話している。お婆さんは心配そうに「どうした、何か悪いものでも食べたのか」と聞くと、「今日、あずき餅食つた。『食わねあ』てば、

兄は父に叱られていた。「なんだ男のくせに、そつたら（そんな）こと言うて元気ない」と言うているが、後は聞くひまがなかつた。

提灯に火をつけるにも急いだので、なかなかつかなくつたが、二回も三回もやつて、ようやく（やつと）のことのでついた。それを持つて行つた時は、もう用意は出来ていた。「これで行くどー」と、二人並んで馬を追つた。道に出てその後を見てみると、間もなくあかりが見えなくなつた。家に入ると、手の冷たいのに気がついた。ひねつても分からないほどであった。

父は部屋から出て来て「行つたか」と聞いたから、「いつから（とつくに）見えなくなつたや」と言うているところへ、弟は息を切りながら来た。「どござ行つて来た」と聞くと、「山千（屋号）さ行つて来たんだ。今、山千の兄ちゃ達さ」と足をあぶっている。部屋へ行つてみると、また唸っている。すこし経つうちに、ほかの人も来た。庭がすべるのか山千の兄ちゃは、すつてんと転

『けいけい（食え食え）』と言うから、たつた一つ食つたら一里（約四キロ）ばかり来て痛んだ。四里痛んで来た」と言い終わると、息を切つてまた唸つた。

見ていると可哀そうでならぬ。それから間もなく、また前よりも多く痛んできた。父は「すぐ病院」と騒いだ。二番目の兄と三番目の兄と行くことにして馬を出した。私も提灯を持つて行つた。親馬が外へ出ると子馬はあばれる。おまけに馬車馬までが騒ぎだてる。

そのうちに二番目の兄は「家に行つて外套着てくる」と言つて、私に馬の手綱を持たせたから、馬の嫌いな私は、どうして騒ぐ馬を曳いていられよう。それでも兄の来るのを待つていた。馬はだんだん自分の方に寄つて来る。おつかないから先へ進めば馬も進む。しまいに雪の中へどぶどぶと入つて行つた。そこはまた薪を投げていた所であつたから、それに躓いて転んだので、提灯は消える、底はとれた。

兄は父に叱られていた。「なんだ男のくせに、そつたら（そんな）こと言うて元気ない」と言うているが、後は聞くひまがなかつた。

提灯に火をつけるにも急いだので、なかなかつかなくつたが、二回も三回もやつて、ようやく（やつと）のことのでついた。それを持つて行つた時は、もう用意は出来ていた。「これで行くどー」と、二人並んで馬を追つた。道に出てその後を見てみると、間もなくあかりが見えなくなつた。家に入ると、手の冷たいのに気がついた。ひねつても分からないほどであった。

父は部屋から出て来て「行つたか」と聞いたから、「いつから（とつくに）見えなくなつたや」と言うているところへ、弟は息を切りながら来た。「どござ行つて来た」と聞くと、「山千（屋号）さ行つて来たんだ。今、山千の兄ちゃ達さ」と足をあぶっている。部屋へ行つてみると、また唸っている。すこし経つうちに、ほかの人も来た。庭がすべるのか山千の兄ちゃは、すつてんと転



写生（推奨）大野小尋五 松代より子（大正13年10月号）

んだ。一人来、二人来、しだいに大勢の人が来て元氣をつけさせている。

ブーブーと喇叭の音がしたので、「そら来た、火燃せ」とせきたてられる。医者が来て注射をすると痛みはとまった。その晩、先生は十二時過ぎに帰つた。後で弟は「気が利いている」と皆の人にほめられた。

（大正十一年九月号）

■ことばの意味

（つまご） 爪子。雪よけにわらぐつの先端や全体に取りつけたおおい。

（外套） 防寒のため、服の上から着る衣類。オーバー。

# 母の死 (賞)

大野小高一 爲国はる

私が六つになる春のことであつた。みんなの家では潤かした(水に浸した)種粉を川から上げる時であつた。私の家でも種粉を上げて車に積んで来た。私は車に乗ろうとしてぶらさがつた

が早い、その車は後ろの方へ引っくり返つたのだからたまらない。種粉は私の胸に二、三俵、どどつと落ちた。車までも腿の所が上がつたので、私は骨違(脱きゆう)をした。

あまり苦しがるので、お母さんが青物(野菜)を売りに行く馬車に乗せて、私を函館の骨接ぎ(接骨する人)の所へ連れて行つてくれた。帰つて来る時は、痛みは止まって立つようになったが、十分歩くまでにはならなかつた。

函館から馬車に乗つて、久根別の橋の所まで来ると、馬は何を見て驚いたのか、どんどんと



自由画「写生」「かぶ」が  
載った大正13年10月号と  
同年11月号

走つた。走るとお母さんが「はる、しつかり掴まらなないと落ちるよ」と注意するので、私は車の板にしつかり掴まっていた。すると、どうしたはずみか、お母さんがどんと車から落ちた。私はあまりびびりくりして、わつと泣いた。それでも馬はどんどん走つた。

しばらく経つて、小林さんのお父さんが「何したのだ、何したのだ」と言いながら、馬を掴まえてくれた。小林さんの家の人は、馬に乗つて私の家へ知らせに走つた。またそのうちに小林さんのお母さんは、私を負つて家へ連れて来てくれた。

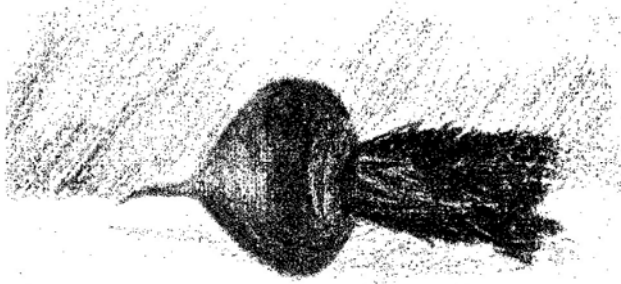
私は家に入つてからお母さんのことを心配していると、少し経つて、沢山の人が何か担いで、どやどやと入つて来た。急いで傍に行つて見ると、それは私のお母さんで、目を閉じて寝てあつた。そして額に大きな穴があいてあつた。驚いてお父さんの所へ行って「どうしたのだ」と聞くと、お父さんは「お母さんが車から落ちたとき、馬に踏まれて死んだ

のだよ」と知らせた。私はまたお母さんの所へ行つて、「お母さん、お母さん」と幾度も呼んだが、もう返事はなかつた。それでうんと泣いた。

今はお父さんと弟と私と三人で寂しく暮らしている。私はお母さんをその時はそんなに思わなかつたが、今はときどき思い出すと、涙がひとりでも出て来る。(大正十二年一月号)

## 綴方選評 鈴木三重吉

入選作六編のうち、釣谷さんの「兄の病氣」を賞に入れました。同じく入選した人の作品などに比べると、中央語に未熟な点も手伝つて、表現が粗つぽくて、がたびししておりますが、

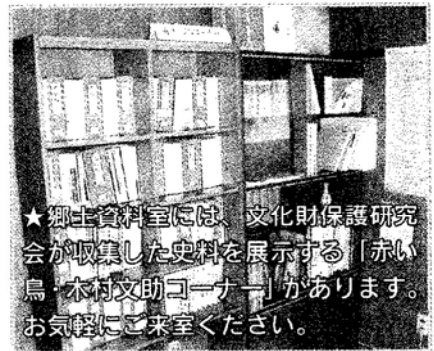


かぶ (推奨) 大野小尋六 野田正道  
(大正13年11月号)

その代わり、全体に荒削りのままのような素朴さと、力強い真実さがみなぎっているところが身上です。生活事実特殊な地方色が出ている点で、或いは人間味から人を引きつける作品です。描写の上では、釣谷さんが馬の手綱を持たせられて、雪の中でまどい騒ぐところが一番活写的に躍り動いております。終いの方で、「山千」の屋号の家との関係がわれわれよそ者に分らないために、弟さんが気が利いていると言つてほめられたという意味がくみ取れないのは、偶然の一つの欠点とも言えます。行つたのはお医者さんの家、たつたのでしようか。

為国さんの「母の死」の中のお母さまは本当にお気の毒です。惨死される前後のすべてのいきさつが簡単な叙述でもって、極めて印象強く現れています。ただ、高等科の人としては、ああいう痛ましいお母さんに対する追憶的感情の表出があまりに単純なような気がします。それ以外の、事象の叙写そのものは、申し分なくよく出来ています。

自由画選評 山本 鼎  
松代より子さんの「写生」は大変のびのびしたい絵です。より子さんの学校の人たちの絵は、どれも落ちついた、そして



★郷土資料室には、文化財保護研究会が収集した史料を展示する「赤い鳥 本村文助コーナー」があります。お気軽にご来室ください。

無邪気ないい絵でした。この絵と赤かぶを写生した絵とが、やわらかみのあるいい絵でした。より子さんはラフ紙を用いているが、ラフ紙のきめはクレヨン画には、あまりよくありません。普通の画用紙のなるべくきめの細かいのをお選びなさい。画用紙の裏の、布目が出た方へ描くのもなかなかいいものです。野田正道君の「かぶ」は赤かぶのかたまりがよく描けております。一体に丁寧で、こせつかない描きぶりは大変にいい。欠点はバックです。調子はわるくないが、筆が手荒いことと、紫クレヨンの色が絵をさわがしくしています。

※漢字や仮名遣いは現代風に改めています。わかりにくい表現は、かつこ書きで補足しました。

連載

# 赤い鳥に載った大野の作文

町史編さん室

このコーナーでは、大正から昭和のはじめにかけて、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌「赤い鳥」に掲載された大野小学校の児童の入選作品を連載していきます。

赤い鳥には、当時の大野小の木村文助校長が子供たちの作文や絵などを投稿し、次々と入選。「日本一のおつづり方学校」と言われました。

今回は、大正十二年（一九二三）十一月号の「兎盗人」（中村とくさん）と同十三年一月号の「夜廻り」（金川つねさん）の作文二点と、同十四年八月号の「女の子」（中村かんさん）、同年十月号の「風景」（小川勇さん）の自画像二点（いずれも口絵）を紹介します。

## 兎盗人（賞）

大野小高二中村とく

この間から、家の空き鳥小屋に兎をあずらいた（預かった）隣のおばさんは娘が病気なので、函館に行った。親の豆腐屋の婆さんは、おばさんがいないので、来ては兎を養っているのです。



作文「兎盗人」「夜廻り」が掲載された大正十二年十一月号と同十三年一月号

今朝も早く来て、草を食わせていたが、私の家に来て、私に「昨日、誰か鳥小屋のあたりに来ねがたがね」と聞いたので、「昨日だら、誰も行がねよであつたよ」と言うと、「やあ、たまげたもんだ。また兎二匹盗まれたもんだ。さきにも（前にも）一匹盗まれて、また」と言ったので、「婆ちや、ほんとはげあ。いつばいあるしてあ（いるから）。勘定間違いたんだべさ」と言うと、「いやいや、しつかり何べんも勘定したて、どうしても二匹足れねもの。こんどまた盗まれれば大変だして（大変だから）、こんどあつちさ兎を入れるのをこ

しらえて、持って行かねばなねえ」と言つて出て行つたが、その日のうちに皆、兎を持つて行つてしまった。

その晩でした。私は一人、便所に行った。行くの間もなく、ちらも丈は同じくらいで着物は黒地、頭には何もかぶらなかつた。二人は私がいるとは夢にも知らない様子であつた。家からは茶碗を洗う音が聞こえて来ると、一人は流しの方から内を覗いていた。少したつて二人は何かひそひそ話をしていた。それでも家の人たちは少しも知らない様子でした。

私が二人はどつちへ行くかと、よく注意して見ているとも知らず、安心したらしく、足を鳥小屋の方に向けた。私は「あの畜生、こうして毎晩来て、兎を取つて煮て食うのだな」と思い、すぐに二人に見つからないように、別の方から廻つて家に来た。家では皆、何か話をしながら笑つていたが、私が入つて来たので、一同は私の方を向いた。「皆黙つていせ（いなさい）」と、いきなり言つたので、皆は「このわらし（子供）、何しゃべつてゐるばあ。寝言していた」と笑つた。私は笑うどころではないので、「今ね、おら便所に

だけあ、二人の男が便所の脇の方から来て、おらいたのに知らないで、さきにとみちゃん

が茶碗洗つてだ方さ来て、すぐ兎のいであつた鳥小屋の方さ行つたや」と真面目になつてゐるので、父は「行つて見べし（みよう）行つて見べし。誰だか少し顔見べし」と言つた。そばにいた向かいの徳蔵さんも、兄と二人で「行つて見べし」と言つて、二人はさきに出て行つた。

その晩は真つ暗であつたので、母は「暗いして（暗いから）、提灯持つて行け」と言つたので、すぐ提灯をつけて私は行つて見たが、鳥小屋にはただ兄と徳蔵さんと二人よりいなかつた。「こっちの方さ来たんだども（来たのだけれど）、いねてげあ」と聞くのと、「きつとおらたち来た時、逃げたんだべ」と兄が言う。「裏さ徳蔵さんが言つたので、三人は行つて見たがいな。

## 女の子（推奨） 大野小尋三中村かん

（大正十四年八月号）



その時、二、三間前の方にあら、さくらんぼの下でバリバリと枝を踏む音がしたので「やあ、あこ（あそこ）にいたんだあ、きつと三人が行つて見たが、もう逃げたのか、いなかつた。家にいた父は「さきにも、おら家の兎も盗んだもんだべ。したして（だから）、兎のいるところ覚えて、盗むに来たんだべ」と言つた。（大正十二年十一月号）

■ことばの意味  
 「畜生」人をのしつていう語。不道徳な人をいう。ちきしよう。  
 「二、三間」一間は約一・八間。おおよそ四、五間の距離。  
 ※漢字や仮名遣いは現代風に改めています。わかりにくい表現や方言などは、かつこ書きで補足しました。

# 夜廻り (賞)

大野小高一 金川つね

四、五日前に、私の家の組は、上の隣と下の隣の家とお寺と五軒でしたが、寺の人は用事があつて出ませんでした。家は大人は母たった一人なので、ほんとうに困った。お母さんは「困ったなあ。行かないと五十銭取られるし、行ったら世間の人に、あんだこんだて（ああだのこうだの）言われるし困ったなあ。仕方がない、五十銭取られるより」と言つて行くことにした。そして私に大切なものをみんなよこした。

私は一番大事なものを腰にゆわいた（結んだ）。そして残りをまくらの下に入れた。八時を打ったから、母は丹前を着て、風呂敷をかぶつて、角巻を持って外に出た。私はすぐにしんばりをかつて（掛けて）来た。それから電灯をかきからはずして



自由画「女の子」「風景」が載った大正14年8月号と同10月号

座敷へ持つて行くこうとしたら、どういはずみか、手から抜けて板に落ちた。ジャガンとなつてパツと電気が消えた。私は体がぞつとなつて頭の先から足の先までしみとおつた。外にはまだ母さんがいた。そして「何したんだべ。やあやあ困った。どうしたんだべ」と言つて戸を開けようとするけれども、開かないので、「戸を開けれ」と外からどなった。私は台所から足袋はだしで、土間に下りて戸を開けた。お母さんは家の中へ入つて来た。「もし電気が伝わつていたら死んでしまうべ」と言つて、私の肩を一つ強くたたいた。お母さんは台所へ上がつて行つた。そして手探りで取つて電灯をつけて見ると、パツとついた。お母さんは「ああよかつた。笠だけ壊れた」と言つた。



風景 (推奨) 大野小高二 小川 勇 (大正14年10月号)

こえて来る。私はお母さんは今、丁木をたいて歩きながら何を思つているのだろう。今ごろお父さんでも生きていたら、こんな場合にどんなに安心して眠つてゐるにやいだろう、と思つたら、何だか悲しいようなくやしいようなんだんと高く聞こえて来た。そして私の家の窓あたりまで来ると、パタリと止まつた。そして窓から家の中を覗いて見たようであつた。

開いて開いていた。それから、いろいろのことを考えながら、いつしか眠つてしまつた。  
(大正十三年一月号)  
■ことばの意味  
【夜廻り】夜回り。夜、警戒のために地域を回り歩くこと。当時は消防組・消防団の前身が数軒ごとの当番制で担当した。参加できない家には罰金があり、この地域は罰金が五十銭。  
【丹前】衣服の上から着るそでの広い綿入りの防寒用和服。  
【角巻】防寒のため女性が使う大形で四角い毛織物の肩掛け。  
【しんばり】戸口が開かないように押さえておくつつかえ棒。  
【足袋はだし】足袋をはいたまま、下駄や草履をはかずに地面を歩くこと。  
【番屋】消防組の詰所。現在も消防分団の詰所を消防番屋と呼んでいる。  
【丁木】拍子木のこと。  
●綴方選評 鈴木三重吉  
中村とくさんの「兎盗人」はうまいものです。兎の保護のため描かれたあのお婆さんも、短い描写でよく風貌が出ています。「やあ、たまげたもんだ」以下、いちいちの対話がまざまざと目につります。お父さんたちが「行つて見べし、行つて見べし」と出かけて行かれ、みんなで方々をさがして回るあたりなども、目の前に見えるように活写されています。村の生活のある縮図として、ユーモアのある面白い作品です。

金川つねさんの「夜廻り」は、しみじみした哀感をひく、信実ないい作です。すべての経過をはじめからしまいまで、たしかかな叙写ではきはきと実感的に写し上げています。夜中に母さまがカチカチと拍子木を叩きながら近づいて来られて、窓から家の中を覗いて行かれるあたりなどは、特にひしひしと身につまされて来ます。金川さんは従順ないいお子さんのようです。どうかこの上とも十分お母さまのたよりになつて力をつけてお上げなさい。  
●自由画選評 山本 鼎  
中村かんさんの「女の子」は、ほんとうに良い絵です。形もよく、描きぶりに味わいがあり、第一感じが生きています。ことにそこから上の方がよく、顔などうまい。  
小川勇君の「風景」は、ていねいな素描ですが、少し一調子です。もつと物により場所によつて、濃いところとうすいところがあるはず。その自然のトーンが見てありません。

資料閲覧(赤い鳥・木村文助「ナナ」)

「大野町郷土資料室」

町市街地に入り大野小学校の校門を入って右側の建物です。

〇四一―二二〇一

北海道亀田郡大野町本町二〇〇

TEL (〇一三八) 七七・六六八

開館；九・〇〇〇―二二・〇〇〇

一三・〇〇〇―一六・〇〇〇

(町教委社会教育課が対応します)

・休館；毎月第一月曜、臨時、年末年始

・函館市↓車で国道二二七号に入り大野町市街地まで、20〜30分。

・道北方面↓車で国道五号の大沼トンネルを抜け、5分ほどして

大野方向に右折し10分程度着きます。



赤い鳥・木村文助  
閲覧目録

大野町郷土資料室

北海道亀田郡大野町本町200  
TEL (0138) 77-6681

2003.1.20



大野町文化財保護研究会

発行

大野町文化財保護研究会

(ぶんぽけん)

〇四一―二二〇一

北海道亀田郡大野町本町六八

会長 木下 寿実夫

(〇一三八) 七七・八五三五